

平成 29 年度天津外国語大学 教員派遣報告

日本語コミュニケーション学科 准教授

藤本かおる

2018 年 3 月 22 日

1. 天津外大での講義や学生・教員交流の感想等

講義には、文学や文化を専攻している大学院生 1 年生を中心に 38 名の参加があった。授業は、サブカルチャー作品を通して日本語の役割語やオノマトペなどの事象を概観し、そして字幕翻訳について考えるという流れで行われ、毎回学習者同士の話し合いや作業を含んだアクティブラーニングで行った。学生は真面目で積極的に授業に参加していたが、日本語会話に対する自信のなさや恥ずかしさなどからか、率先して日本語で発言する学生は限られていた。しかし、学生同士の話し合いは活発で、これまで学んだことをもとに、新しいアイデアを考えることができていたと思う。

日本語を学んでいる学習者は皆日本のアニメや漫画に興味があるという、ある意味ステレオタイプが日本人にはあると思う。しかし、中国では消極的理由（例えば大学入試の点数で希望する学科に入学できなかった）で、日本語を選択した学生も少なくないようである。もちろん、大学院で学んでいるので、今では日本語が好きになっているとのことだが、日本人が思っているよりも、「アニメや漫画好き！！」という学生は少ない。しかし、日本語の勉強のためにドラマを見ている人は多く、また、子供の頃には日本のアニメを見ていた世代なので、授業で日本のサブカルチャーを扱うことに問題はなかった。中には日本のアニメや漫画好きの学生もいるので、そのような学生が持って来たりソースで授業は盛り上がった。授業外には、受講している学生に声をかけ、数名とお茶を飲んだり近くの観光に一緒に行ったりした。新学期が始まったばかりで授業がたくさんあり、授業を履修した全員と交流できなかったのは残念だった。

日語学院学院長の朱先生、田先生、任先生にお会いし、特に任先生には、初日から最終日まで色々とお世話になった。先生方は皆お若く、学院自体が澁刺とした印象を受けた。また、天津外国語大学には、裏千家本部から毎年師範の方が講師として派遣されており、毎学期茶道の授業が開講され、1 学期で基本的な茶道の作法を学べるそうである。現在赴任されている講師の方とお会いすることができたので、授業を見学させていただいた。日本文化に触れるこのような授業があり単位が取れるのは、素晴らしいことだと思った。

2 天津の所見・所感

天津外国語大学は、五大道と言われる歴史地区に位置している。歴史的な建物の向こうに見える高層ビルがいかにも現代中国を象徴しているが、大学の周囲は商業地区と違いのんびりした雰囲気です。学内には学食棟の他にカフェがいくつかあり、これらのカフェには英語のメニューもある。お茶だけでなく食事でも現金での支払いもできるので、中国語がわからなくても問題ない。

また、大学から徒歩 5-10 分程度のところに民園というイギリスの競馬場跡を利用した運動広場があり市民に開放されていて、一日中ウォーキングやジョギングをしている人がいる。学内にも運動場はあるが、民園の方が落ち着いて散歩ができるのでお勧めである。時間がある時に私も 30 分ほどウォーキングをした。また、民園の地下にはスーパーマーケットもあり、日用品が購入できる。

天津には愛新覚羅溥儀が過ごした家があり、現在一般公開されている。長い間打捨てられていたそうだが、2007 年にリノベーションがすみ当時の面影を偲ぶことができる。また、古文化地区は清王朝時代の建物を模した観光地だが、まとめてお土産を買うことができるので、便利だった。どちらもタクシーで 20 元程度で行くことができる。Uber を使っている学生も多く、便利そうだが、残念ながら観光客には使えない。しかし、タクシーはメータがついており街中のどこでも乗ることができるので、不便さはあまり感じなかった。

以上



天津外国語大学のシンボル建築



教員・外国人留学生が宿泊するビル



本学から留学に行った学生（右1）と現地学生との食事会



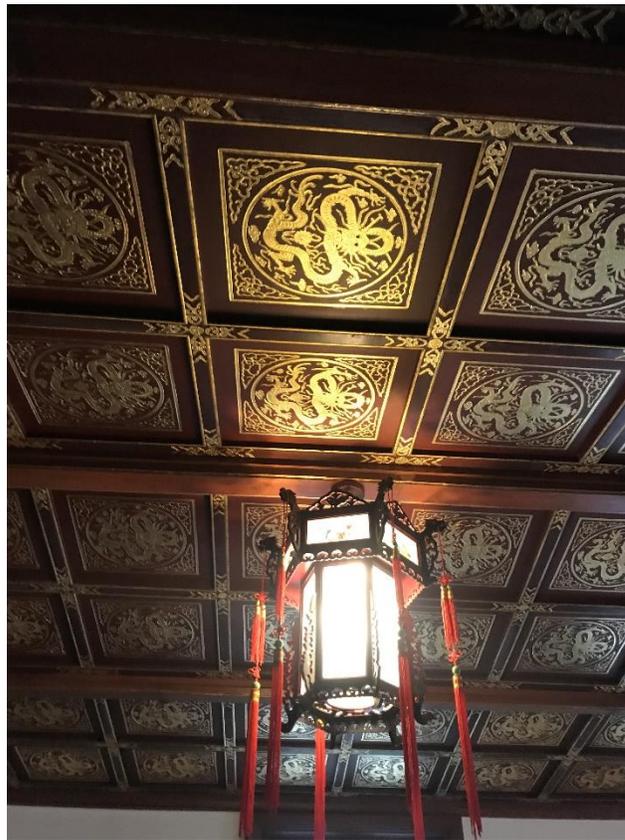
天津古文化街で食べ歩き



大学の近くにある運動場兼野外ライブ場—「民園」



天津で最も歴史のある繁華街—「和平路」



最後の皇帝：愛新覺羅溥儀の旧居―「津城静園」